

Title	「らしい」と推論
Sub Title	Rasii and inference
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.236(109)- 249(96)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「らしい」と推論

喜田 浩平

1. はじめに

日本語の助動詞「らしい」は多義的である¹。名詞句に後接し「～にふさわしい」と解釈される「らしい」（「山中教授らしい謙虚な態度」）は除外するとしても、「推量的」とされる「らしい」と、「伝聞的」とされる「らしい」が様々な発話において観察される。

発話レベルの多義性を説明するために、文タイプのレベルにおける「らしい」の言語的意味（様々なコンテキストを通じて一定不変の意味）をどのように想定すればよいだろうか。本稿では、文レベルの「らしい」は一義的であると仮定し、発話レベルの多義性は発話の意味構築のプロセスで用いられる推論の種類の違いに起因することを明らかにする。

2. 「らしい」の二つの用法

「らしい」には「推量」と「伝聞」の用法があると考えられている。以下の(1)(2)(3)が推量の用例で、(3)(4)(5)が伝聞の用例である。

- (1) [物音を聞いて] 誰かいるらしい。
- (2) [傘をさしている人を窓越しに見て] 雨が降っているらしい。
- (3) [匂いをかいで] 腐っているらしい。
- (4) [新聞の記事を読んで] 大学生の学力が低下しているらしい。
- (5) [テレビのニュースを見て] 来年は景気が上向きに転じるらしい。
- (6) [週刊誌の記事を読んで] 牛肉は老化防止にいいらしい。

様々な発話の中の「らしい」が伝聞的であるか推量的であるかを判断するため、いくつかの規準を考えることができる。

まず、推量の「らしい」は「ようだ」と入れ換えても発話の全体的意味は著しく変化しない。ただし、両者が完全に同義というわけではないし、入れ替えが不可能なケースもある。一方、伝聞の「らしい」は「そうだ」と入れ換えても大きく意味が変わることはない。ただし常に入れ替えが可能であるとは限らない。したがって、「ようだ」あるいは「そうだ」との入れ換え可能性は、「らしい」の二つの用法の区別に関して暫定的なテストにはなり得るが、決定的なものではない。

二つの「らしい」は、後続の発話によって顕在化することができる。推量の「らしい」は、それを含む発話に続けて「私はそう思う」あるいはそれに類するもの（「これが僕の意見だ」「俺にはそんな感じがする」など）と発話しても違和感がない。これらは逆に、伝聞の「らしい」の発話とはうまく結びつかない（「私もそう思う」なら可能である）。一方、伝聞の「らしい」を含む発話に続けて「誰かがそう言っている」あるいはそれに類するものや「しかし、私はそう思わない」やそれに類するものを発話しても問題ない²。さらに対話形式で、聞き手が「で、君はどう思うの？」やそれに類する問いかけを行っても問題ない。これらは逆に推量の「らしい」にはふさわしくない。

3. 「らしい」の言語的意味

発話レベルで「らしい」に二つの用法を区別することは妥当であるとして、文レベルで「らしい」にどのような言語的意味を想定することができるだろうか。二つの立場が考えられる。一つは、推量の「らしい」と伝聞の「らしい」にそれぞれ対応するように二種類の言語的意味を想定するものである。もう一つは、文レベルの「らしい」には言語的意味は一種類しかないとするものである³。本稿では後者の立場をとり、以下のような言語的意味を仮定する。

- (6) 「Pらしい」における「らしい」の言語的意味
「Pが前提から推論によって導き出された結論である」ことを示す

具体的にどのような「推論」が行われているかという問題は後で詳しく検討する。当面は、「Pらしい」という発話では「らしい」が推量的であろうと伝聞的であろうと何らかの推論が行われている点を明らかにしたい。

まず推量の「らしい」から。これと「ようだ」を比べると両者の違いが明確になる。例えば(1)の「誰かいるらしい」と「誰かいるようだ」を比べてみよう。それぞれが同じ状況で発話されたと仮定すると、「誰かいるようだ」の話者は「そのように感じられる」「そのように見える」という印象を率直に言語化しているのに対し、「誰かいるらしい」の話者は物音の存在を前提として、そこに何らかの知的操作を加えて発話している。この点は次のような例を見るとより明確になる。

(7) [料理を味見して] 塩が足りない {ようだ/*らしい}。

(8) [服を試着して] 大きすぎる {ようだ/*らしい}。

いずれも味覚や触覚、視覚などの感覚を通じて得られた印象をストレートに言語化しているため、推論が介入する余地はない。そのため、「ようだ」の使用は問題ないが、「らしい」は不自然となるのである。

また、伝聞の「らしい」も、「そうだ」と比べるとその特徴が明確になる。例えば(4)の「大学生の学力が低下しているらしい」と「大学生の学力が低下しているそうだ」を比べてみよう。「そうだ」の話者は、誰かが「大学生の学力が低下している」と述べたのを全く同じではないもののほぼそのまま繰り返している⁴。一方、「らしい」の話者は、誰かの発言を一旦引き受けた上で、やはり何らかの知的操作を加えた上で発話している。この違いは、以下のような例によって顕在化することができる。

- (9) どうやら、大学生の学力が低下しているらしい。
- (10) *どうやら、大学生の学力が低下しているそうだ。

「どうやら」の持つ意味を正確に記述するには慎重な議論が必要であるが、その発話が少なくとも何らかの知的操作を含意することは間違いないであろう⁵。「どうやら」と「そうだ」の結びつきが不自然なのは、「そうだ」の発話がそのような操作の存在を条件としないためと推測できる。一方、「どうやら」と「らしい」の結合は問題ない。

4. 前提の直接性と間接性

「らしい」の言語的意味を(6)のように仮定できるとして、それではなぜ「らしい」の様々な発話が推量と伝聞の二つの用法に分かれるのだろうか。一つの仮説として、「らしい」の二つの用法の違いを推論の前提となる情報の直接性と間接性の差異に起因すると考えてみよう⁶。直接的な情報とは、話者が知覚によって入手するものである。間接的な情報とは、他者の発言に基づく言語的なもので、典型的には新聞やテレビ、インターネットなどの媒体を通じて得られるものである。推論の前提が直接的な情報である場合は「らしい」は推量を表し、間接的な情報である場合は「らしい」は伝聞を表す、という仮説を検討してみる。

確かに、一見するとこの仮説は妥当であるように見える。上記(1)(2)(3)では物音、視覚的映像、匂いなどの認識による情報が前提となり、これらは直接的である。(4)(5)(6)では前提となる情報は間接的なものと考えられる。

しかし、この仮説には次のような問題がある。前提となる情報が間接的であるにもかかわらず、「らしい」が推量的に解釈される例が存在するのである。例えば、(4)と同じ状況で、次の(11)のように発話するとしたらどうだろうか。ここで「この男」とは、新聞紙上で「大学生の学力が低下している」と発言した教育評論家を指すものとする。また、(11)の話者は、大学教育の実態を「学生の学力低下」という一言で片付けてしまう論調に常々

不満を感じていると仮定する。

(11) この男は大学教育の実態を全く理解していないらしい。

この「らしい」は推量的である。上で提案したテストを適用してみよう。まず「ようだ」あるいは「そうだ」との入れ換えでは、明らかに「ようだ」に近いことがわかる（話者とは異なる誰かが「この男は大学教育の実態を全く理解していない」と発言した場合は別である）。また、この発話の後に、「私はそう思う」と続けても違和感はない。

さらに、教育評論家が「大学生の学力が低下している」と発言した状況で、もう一つ別の推量的「らしい」の発話が可能である。例えば以下のようなものである。

(12) 最近の大学生は勉強しなくなったらしい。

ここでも、「ようだ」との入れ換え可能性、また「私はそう思う」の接続可能性により、「らしい」が推量的であると認定できる。（もちろん、話者とは異なる誰かが「最近の大学生は勉強しなくなった」と発言した場合は伝聞の解釈も可能である。）

この観察が正しいとすると、前提となる情報が間接的なものである場合、「らしい」は推量的にも伝聞的にもなり得ると結論しなければならない。だとすると、そのような情報の直接性・間接性は「らしい」の二つの用法には対応していないということになる。

なお、前提となる情報が直接的な場合に「らしい」が伝聞的に解釈されるケースは存在しないようである。その理由については後で論じる。

5. 推論のパターン

「らしい」の二つの用法の違いは、(6)で示した図式における推論のパターンが異なることを明らかにしたい。

まず、推量的用法から見てみよう。(1)(2)(3)について、そこで用いられる推論がどのようなものであるか観察するため、前提と結論を列挙してみよう。矢印の前が前提、後が結論である。

物音がする

⇒ 誰かいる

傘をさしている人がいる

⇒ 雨が降っている

匂いがする

⇒ 腐っている

この推論は、アブダクション (abduction) と考えてよいだろう⁷。アブダクションとは、ある事実に関して、それを最も合理的に説明できる原因や理由を発見する推論である。「路面が濡れている」という事実に基づいて、「雨が降った」と推測するような場合がその一例である。(1)(2)(3)でも、話者がそれぞれ「物音がする」「傘をさしている人がいる」「匂いがする」という結果を説明するための原因を探し求めたところ、「誰かいる」「雨が降っている」「腐っている」という結論に至ったのである。

では、伝聞用法はどうであろうか。(4)(5)(6)の前提と結論を明示してみよう。ここでも、矢印の前が前提、後が結論である。また、Xはそれぞれの前提となる情報の情報源（教育評論家、エコノミスト、医者など）を指す。

Xが「大学生の学力が低下している」と言った

⇒ 大学生の学力が低下している

Xが「来年は景気が上向きに転じる」と言った

⇒ 来年は景気が上向きに転じる

Xが「牛肉は老化防止にいい」と言った

⇒ 牛肉は老化防止にいい

このような推論を、「権威推論」と名付けよう。「権威推論」とは、修辭学で言うところの「権威による論証」あるいは「権威に訴える論証」をアレンジしたものである⁸。このような論証は、「Pは真である、なぜならXがPと言ったからである」と図式化できるような論証形式である。多くの場合、Xは当該分野の権威と考えられている人物や書物である。哲学におけるアリストテレス、キリスト教神学における聖書がそのような権威の代表である。(4)(5)(6)では、例えば教育評論家、エコノミスト、医者などがメディアを通じて発言したような場合を想像すると、同様の構図が想定できるであろう。

「権威推論」と「権威による論証」には微妙な違いがあるので注意が必要である。まず、「推論」の方では「権威」の概念を拡張して用いる必要がある。なるほど、(4)(5)(6)のような例であれば情報源と考えられる専門家を(多少のいかがわしさはあるものの)「権威」と呼んでも差し支えないだろう。しかし、例えば新聞の投書欄で「今年は山形県ではたくさん雪が降った」という文章を目にした人が、この前提に基づいて「山形は雪が多いらしい」と発言したとしよう。このようなケースで投書の書き手を「権威」と呼ぶのは、この語の本来の用法からは逸脱している。したがって、権威推論の「権威」とは、情報の流れの力関係で上位に位置する「情報源」や「情報提供者」という程度の意味に理解しなければならない。また、「推論」と「論証」の目的の違いにも注意する必要がある。一般に権威による論証は一人の聞き手や多くの聴衆を説得することが目的であるが、権威推論は必ずしも他者の説得を目的とはしない。強いて言えば、話者が自分自身を説得し、ある種の信念を形成することが目的である。

以上の観察をまとめると、(6)の図式において、推論がアブダクションの場合は「らしい」が推量的に解釈され、権威推論の場合は「らしい」が伝聞的に解釈される、という仮説を立てることができる。

この仮説が正しいとすると、すでに指摘した未解決の問題に合理的な説明を与えることができる。まず、前提となる情報が直接的な場合で、「らし

い」が伝聞的になるケースを見つけることが困難である点について。これは推論のパターンの違いによって説明できる。前提が直接的な場合、アブダクションを行うのは問題ないが、そもそも権威推論を行うことはできない。なぜなら、定義上、権威推論の前提となる情報は「XがPと言った」という形を取るが、知覚に基づく直接的情報はそのような条件を満たさないからである。

次に、(4)と(11)および(12)の比較によって明らかになった問題、すなわち同じ間接的情報を前提にしながらも推量の「らしい」も伝聞の「らしい」も発話可能なケースが存在するという問題について。これは、前提が共通していても、推論のプロセスが異なれば到達する結論は異なり、その結果として「らしい」の解釈も違ったものになる、という説明が可能である。(4)ではすでに見たように権威推論が用いられている。(11)の話者は教育評論家が「大学生の学力が低下している」と言ったという事実に基づき、「言う」という行為を合理的に説明するためにアブダクションを用いて「この男は大学教育の実態を全くわかっていない」という結論を導いている(この点は後で詳しく議論する)。以上の点を視覚化するために、(4)と(11)について、両者に共通の前提、推論のパターン、結論を改めて書き出してみよう。(矢印に付した下付文字が推論のパターンを示す。)

共通の前提：教育評論家が「大学生の学力が低下している」と言った
 ⇒_{権威推論} 大学生の学力が低下している (cf. (4))
 ⇒_{アブダクション} この男は大学教育の実態を全くわかっていない (cf. (11))

権威推論の結論を発話化した(4)の「らしい」は伝聞的に解釈され、アブダクションの結論を発話化した(11)の「らしい」は推量的に解釈される。

また、(12)でもアブダクションが適用されていると考えられる。しかし、前提となる情報の捉え方が少し異なる。教育評論家が「大学生の学力が低下している」と言った事実に基づいて、(4)も(11)も「言う」という行為が推論の前提になるが、(12)では発言の内容そのものが推論の前提となり⁹、

そこにアブダクションが適用される。この点を図式化してみよう。

前提：大学生の学力が低下している

⇒アブダクション 最近の大学生は勉強しなくなった (cf. (12))

この発話の話者は、「大学生の学力が低下している」という事実の原因をアブダクションによって探し求め、「勉強しなくなった」という結論に到達している。

推論の前提となる情報が間接的なものである場合は様々な可能性が錯綜していることがわかったので、ここで簡単にまとめておこう。間接的な情報とは「XがPと言った」という形をとる。この情報を前提とする場合、まず大別して「言う」という行為を起点とするケースと、Pの内容そのものを起点とするケースに分けることができる。前者はさらに二分され、「言う」という行為を前提にしつつ権威推論を適用してPを結論する場合 (cf. (4))、その行為の理由をアブダクションによって推測する場合 (cf. (11)) がある。一方、Pの内容が起点となる場合、話者はアブダクションによってその原因や理由を推測する (cf. (12))。

6. 「推論」の概念をめぐる

(6)で示した図式において、「推論」にはアブダクションと権威推論の二種類あることを主張した。この意味での「推論」の概念をめぐる、3点ほど補足しておきたい。

まず、「推論」の概念を狭くとり、演繹的な推論だけを厳密な意味での「推論」と呼ぶならば、アブダクションも権威推論も「推論」ではない。演繹的な推論の特徴は、前提が正しいならば結論も必ず正しいという点にあるいが、アブダクションも権威論証もこの特徴を有していない。アブダクションとはある事実の理由や原因を発見するプロセスであるが、発見された理由や原因の蓋然性がどれほど高くとも、絶対的に正しいものであるとの保証はない。「物音がした」という事実の原因として「誰かいる」という

ことを推測した場合、もしかすると単に風が吹いただけかもしれない。また、権威推論とは「XがPと言った」という前提から、「P」を導く推論である。Xが当該分野の権威であっても、それが理由でPの真理性が保証されるわけではない。「大学生の学力が低下している」と発言した教育評論家がどれほど著名な人であっても、発言内容が発言者の知名度によって常に真とみなされるわけではない。したがって、(6)の一般化における「推論」の概念は、拡張されたものと理解する必要がある。

次に、「らしい」の話者が前提に対してアブダクションを適用する場合、この推論の概念は認知的枠組みの中で理解されなければならない。というのも、アブダクションの前提となる情報は直接的なものも間接的なものもあり得ることを見たが、前者の情報は知覚を起源とするものであり、後者の情報は言語的なものである。つまり、ここで仮定される「アブダクション」は、インプットとして知覚情報も言語情報も同列に扱うことができるものでなくてはならない。次の二つのケースを比べてみよう。まず、話者が知人の太郎の車が駐車場に止まっている光景を目にし、「太郎は帰宅しているらしい」と発話するケース。また、Xから「太郎の車が駐車場に止まっているよ」と教えられ、話者が「太郎は帰宅しているらしい」と発話するケース。前者は直接的な情報を前提とするケースで、(1)(2)(3)に相当する。後者はXの発言の内容を前提とするケースで、(12)に相当する。「概念表示」のようなものを想定し、知覚情報であろうと言語情報であろうとそのような表示レベルに翻訳された上で処理されると考えるか否かは別として¹⁰、二つのケースで用いられるアブダクションは二種類の情報を同列に処理できるプロセスでなければならない。

最後に、間接的な情報を前提とし、アブダクションによって結論を導く推論は、広い意味での「行為」に関する推論であることを指摘しておきたい¹¹。ある主体Xがある行為を行った場合、それを目撃した人は「なぜ、Xはこのような行為を行ったのか？」と問うことで、その理由を推測する。発話も一つの行為である。従って、ある主体XがPを発話した場合、聞き手は「なぜXはPという発話を行ったのか？」と問うことができる。教育

評論家が「大学生の学力が低下している」と発話した場合、聴き手はなぜこの教育評論家がそのような（短絡的な）発話をしたのかと考える。そしてこの行為を合理的に説明する理由として、「この男は大学教育の実態を全くわかっていない」という結論を導くのである。

7. まとめと展望

ここまでの議論で明らかになった点をまとめよう。

まず、文レベルにおける「Pらしい」の「らしい」の言語的意味は、(6)に示したように、前提から推論によって導かれた結論としてPを提示することにある。

推論はアブダクションと権威推論の二種類である。前提からアブダクションによって結論Pが導かれると、「Pらしい」は推量的に解釈される。一方、前提から権威推論によって結論Pが導かれると、「Pらしい」は伝聞的に解釈される¹²。

前提となる情報の直接性・間接性は、「らしい」の解釈に決定的には関与しない。しかし前提と推論の可能な組み合わせの範囲は限定される。

- ・ 直接的情報 + アブダクション = 推量 (cf. (1)(2)(3))
- ・ 間接的情報 (行為) + 権威推論 = 伝聞 (cf. (4)(5)(6))
- ・ 間接的情報 (行為) + アブダクション = 推量 (cf. (11))
- ・ 間接的情報 (内容) + アブダクション = 推量 (cf. (12))

「直接的情報 + 権威推論」という組み合わせは存在しない。これは、権威推論の前提が「XがPと言った」という形式をとるためである。同じ理由で、「間接的情報 (内容) + 権威推論」という組み合わせも不可能である。

以上の分析が正しいとすると、「らしい」が多義的であるという言い方はミスリーディングであろう。正確には「Pらしい」という発話の「らしい」の意味は不変で、「P」の部分の獲得プロセス（アブダクションによる結論であるのか、権威推論による結論であるのか）が異なると言うべきである。

今後の展望を一点のみ指摘しておこう。推論の種類について、本稿の枠内ではアブダクションと権威推論しか議論しなかったが、「らしい」に関与

する推論がこの二種類に尽きるかどうかは経験的に開かれた問題である。例えば次のようなケースはどうであろうか。「明日、天気がよければ花子が来る」ということが対話者間で了解されているとしよう。当日、天気は晴れである。このような状況で「今日は花子が来るらしい」と発話するのは奇妙ではないだろうか。「PならばQ」と「P」から「Q」を導くのは演繹的推論である（いわゆる *modus ponens*）。だとすると、演繹的推論は「らしい」の言語的意味とは相容れない可能性がある。その他の推論も含めて、具体的な事象を精査し、「らしい」の分析にはアブダクションと権威推論の二つで必要かつ十分であるかどうか判断しなければならない。

注

1. 「らしい」については夥しい先行研究が存在する。その主なものは「参考文献」の欄にまとめた。その一つ一つを批判的に検討することは割愛した。本稿の立場に最も近いのは菊地(2000)であるが、そこで用いられている「推論」の概念をより明確にするのが本稿の目的である。
2. 伝聞の表現を顕在化するテストについては澤西(2002)、仁田(1992)、森山(1989)参照。
3. 菊地(2000)、田野村(1991)参照。
4. 「P そうだ」のPが他者の発言の単なる繰り返しでないという点については、喜田(2012)、Watanabe(2012)参照。
5. 益岡・田窪(1992, p.128)は「どうやら」を「[いろいろ考えてみた結果]という意味をもつ」としている。
6. 早津(1988)がそのような仮説をたてている。
7. アブダクションの概念を深く追求したのはアメリカの哲学者・論理学者パース(Charles S. Peirce, 1839-1914)である。詳しくは伊藤(1985)、米盛(2007)参照。また、Carel(2004)はアブダクションを自然言語で表現する場合の問題について興味深い論を展開している。なお、日本語記述文法研究会(編)(2003, p.168)は「[らしい]は、観察されたことを証拠として、未知の事柄を推定する形式である」とした上で、「推定される事柄は、観察された事柄の原因・理由であるのが普通である」と指摘しているが、「アブダクション」という概念は用いていない。
8. 「権威による論証」の簡潔な紹介はAuroux(1998)参照。より専門的な議論はPerelman & Olbrechts -Tyteca(1988)、§ 70参照。Ducrot(1984)、Carel

- (2011)はこのような論証を『ポール・ロワイヤル論理学』に見られる議論と関係づけながら、「ポリフォニー理論」へと発展させている。
9. 「XがPと言った」という発話を談話的に展開する場合、全体を対象とする場合とPのみを対象とする場合がある。この点は喜田(2012)で詳しく論じたので参照されたい。
 10. 例えば Sperber & Wilson (1986/1995) はそのような立場である。
 11. この問題は、Grice (1989) のコミュニケーション観と関連づけて論じると興味深い。Grice は、言語的であろうと非言語的であろうと、コミュニケーションは「意図」を推論によって発見するプロセスと規定した。このアイデアを批判的に継承している研究として、Korta & Perry (2011)、Recanati (2004)、Sperber & Wilson (1986/1995) などがある。
 12. ここでの主張は「アブダクションならば推量」「権威論証ならば伝聞」という含意関係であり、「推量ならばアブダクション」「伝聞ならば権威論証」ということではない。後者に関しては、例えば「そうだ」が用いられる場合に必ずしも権威論証が行われるわけではないという事実から明らかである。一般に、「XならばY」から「YならばX」を導くのは初歩的な誤謬である。

参考文献

- 伊藤邦武(1985)『パースのプラグマティズム 可謬主義的知識論の展開』東京、勁草書房。
- 紙谷栄治(1995)「助動詞「ようだ」「らしい」について」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』東京、明治書院、549-573。
- 菊地康人(2000)「「ようだ」と「らしい」——「そうだ」「だろう」との比較も含めて——」『国語学』51-1、46-60。
- 喜田浩平(2012)「「発話者」から「トーン」へ——論証のポリフォニー理論の可能性」喜田浩平(編)『川口順二教授退任記念論集』Web出版 (http://web.keio.jp/~kida/hommage_kawaguchi.pdf)、81-88。
- 澤西稔子(2002)「伝聞における判断性、及びその特性——「そうだ」「らしい」「とのことだ」「ということだ」「と聞く」の談話表現を中心に——」『日本語・日本文化』28(大阪大学)、29-49。
- 杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』東京、ひつじ書房。
- 田野村忠温(1991)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10(京都大学)、62-78。
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と意味(1)——概言的報道の表現——」『文藝言語研究 言語篇』4(筑波大学)、67-89。

- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』東京, くろしお出版.
- 中畠孝幸(1990)「不確かな判断——ラシイとヨウダ——」『三重大学日本語学文学』1, 25-33.
- 仁田義雄(1992)「判断から発話・伝達へ——伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77, 1-13.
- 仁田義雄(2000)「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』[第2章], 東京, 岩波書店, 79-159.
- 日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』東京, くろしお出版.
- 早津恵美子(1988)「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7-4, 46-61.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法(改訂版)』東京, くろしお出版.
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『國語國文』63-11(京都大学), 20-34.
- 森田良行(1989)『基礎日本語研究』東京, 角川書店.
- 森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』東京, くろしお出版.
- 米盛裕二(2007)『アブダクション 仮説と発見の論理』東京, 勁草書房.
- Auroux, S. (1998) « Autorité (argument d' —) » A. Jacob (éd.) *Encyclopédie philosophique universelle*, volume II, *Les notions philosophiques*, tome 1, Paris, Presses Universitaires de France.
- Carel, M. (2004) « Note sur l'abduction », *Travaux de linguistique* 49, 95-113.
- Carel, M. (2011) *L'Entrelacement argumentatif*, Paris, Honoré Champion.
- Ducrot, O. (1984) *Le dire et le dit*, Paris, Éditions de Minuit.
- Grice, P. (1989) *Studies of the Way of Words*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Korta, K. & J. Perrey (2011) *Critical Pragmatics. An Inquiry into Reference and Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perelman, Ch & L. Olbrechts-Tyteca. (1988) *Traité de l'argumentation*, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Recanati, F. (2004) *Literal Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. & D. Wilson. (1986/1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
- Watanabe, J. (2012) « L'auxiliaire *soda* est-il un marqueur de l'ouï-dire ? », Aoki, S., Dhorne, F. & D. Lebaud (eds.), *Conflicts et Interprétations*, la revue électronique *Inter Faculty* 3, (<https://journal.hass.tsukuba.ac.jp/interfaculty/article/view-File/49/125>), 228-240.